

14 Dec. 2010



第39号

JAAGAだより

日米エアフォース友好協会
Japan-America Air Force Goodwill Association

発行：日米エアフォース友好協会

〒162-0842 東京都新宿区市谷
砂土原町1-2-34 KSKビル3F

編集：JAAGA事務局

印刷：財団法人 防衛弘済会

ホームページ：http://www.jaaga.jp

在日米軍兼第5空軍司令官にフィールド中將が着任

ライス前司令官は航空教育訓練軍団司令官へ

10月25日(月)、横田基地において、エドワード・ライスJr.中將(当時、以下同じ)からバートン・フィールド中將への在日米軍兼第5空軍指揮官交代式(チェンジ・オブ・コマンド)が執り行われた。

式典は10時半から横田基地第15格納庫で行われ、外務大臣政務官、米国駐日大使、軍関係者、周辺自治体の首長等、多数が参加した。自衛隊からは折木統合幕僚長、外衛航空幕僚長他多くの部隊指揮官・幕僚が参加されていた。JAAGAからは、竹河内元会長、遠竹前会長、津曲会長、榎副会長、阪東、山本(隆之)、高橋(健二)、源理事が参加した。

日米両国歌演奏、牧師による祈祷の後、式典執行官である太平洋軍司令官ウィラード海軍大将から、「19世紀のペリー提督に遡る日米の関係が今日の日米同盟として存続され、それを築き上げている全ての方々に感謝します。ライス中將が在日米軍を率い日米同盟が維持され日米関係が発展してきたことに敬意を表します。奥様の協力にも感謝します。そして大将への昇任を祝福します。新司令官フィールド中將が伝統の上に日米同盟を更に成長させていくことを確信しています」との挨拶があった。同じく太平洋空軍司令官ノース空軍大将からも、ライス中將の優れた指導力、功績を讃えるとともに新勤務地での活躍を祈る挨拶と、フィールド中將の活躍を期待する挨拶があった。

その後、ウィラード司令官からライス中將に功績を讃える勲章が授与された。ライス中將からは、「皆さんに見守られ指揮ができたことは幸運であり、感謝しています。自衛隊を始め日米同盟のために尽力した方々との交流と友情に感謝します。在日米軍所在全員に感謝します。日米同盟は両国の結び付きの中核となっています。それは次の50年間、その後もそうあり続けます。日本の皆様を永遠に忘れはしません」との挨拶があり、日本語で「またお会いできるまで」と締め括られた。そして、ライス中將への部隊の最後の敬礼が行われた。



Gen. North, commander of PACAF (left) and Lt. Gen. Burton M. Field, new commander of U.S. Air Force Japan and 5th Air Force (right)

続いて、在日米軍司令官旗と第5空軍司令官旗がフィールド中將に渡され、指揮権が継承された。新司令官フィールド中將からは、「日本に住みたいという子供のころからの夢が現実になり嬉しく思います。日米両国のみならずアジア地域にとっても日米同盟が重要であり、その絆をより強固なものにしていきたいと思います。精一杯、日米のために頑張ります。宜しく願います」との挨拶が行われた。

フィールド中將への部隊の最初の敬礼が行われ、そして、中將の名前を記入したプレートの貼られた第5空軍司令官機(F-16)が披露され、約1時間に亘る式典は終了した。交代式典終了後、将校クラブにおいてレセプションが行われ、JAAGAメンバーは新司令官とそれぞれ挨拶を交わした。

フィールド中將は、1979年、米空軍士官学校卒業の戦闘機パイロット出身。F-16、F-22A等、3,400飛行時間以上の飛行経験がある。前勤務地のペンタゴンから日本に着任されたが、初めての日本勤務となる。2人のご子息は米空軍に勤務されている。ライス中將は大将となり、航空教育訓練軍団(Air Education and Training Command)司令官となられた。

(源理事記)

レッド・フラッグ・アラスカ演習参加を激励

5月25日(火)、織田、射場、原田理事が航空総隊司令部を訪れ、米空軍演習(レッド・フラッグ・アラスカ)参加者に対する激励品を岩崎航空総隊司令官に託し、訓練の成功を祈念した。

今年度は、6月2日から7月2日の間、航空総隊(第7航空団及び警戒航空隊主体)及び航空支援集団(第1輸送航空隊主体)からF-15×6機、E-767×1機、C-130×3機、KC-767×2機(初参加)、携SAM追従訓練器材×6セット、人員330名が参加した。今回は、KC-

767との空中給油によるF-15の多数機同時在空の訓練が特徴であった。

演習修了後、訓練部隊指揮官第7航空団飛行群司令平塚1佐から当協会に対し「皆様からのお志は、隊員の士気高揚や航空自衛隊への理解促進に有効活用させていただきました。訓練部隊へのご高配に感謝し、あらためて御礼申し上げます。」との礼状が届いた。

(原田理事記)



Dir. Orita, JAAGA, hands a gift to Lt. Gen. Iwasaki, Air Defense Command.



Formation flight by JASDF aircrafts participating in "Red Flag Alaska"

日米下士官相互部隊研修参加を激励

9月28日(火)、香川理事長、高橋、井上、原田理事が空幕人事教育部長杉山空将補を訪ね、平成22年度日米相互部隊研修(米空軍下士官の受入れ)に対する激励品を手渡した。本研修は平成8年度に開始されて以来15年目を迎えており、今年度の空自での受入れ計画は下表の通りである。尚、空自隊員の米軍部隊研修も4/四半期に実施される予定である。人教部長からは、日米相互理解に重要な研修であり、年々充実してきているとの説明と

受入基地	期 間	差出基地	参加人員
那 覇	10.7~10.15	嘉手納	7
松 島	4/四半期	三沢	7
小 牧	4/四半期	横田	7

ともに、継続したJAAGAからの現場への支援を大変有難く思っているとの御礼が述べられた。

(原田理事記)



Chief Dir. Kagawa, JAAGA, hands a gift to Maj. Gen. Sugiyama, Air Staff Office.

スペシャル・オリンピックを支援

平成22年度スペシャル・オリンピックが米軍の横田（5月）及び三沢基地（8月）で開催された。JAAGAはこの催しに対し毎年支援品を送り、行事を支援している。今号では、関東スペシャル・オリンピック委員会からいただいたJAAGAへの礼状及び三沢支部長からの記事をお伝えする。



Opening ceremony of Special Olympics in Yokota air base

— 関東スペシャル・オリンピック委員会から礼状 —

平成22年5月15日（土）、第31回関東スペシャル・オリンピックが横田基地で開催され、近隣の市、町、そして基地関係者など、16団体、総勢350人以上のスペシャル・オリンピック選手たちが参加しました。それまで不安定な天候だったにもかかわらず、当日は晴天に恵まれ、1日気持ちよく、楽しく過ごすことができました。

今年も、自衛隊と米軍基地関係施設から大勢のボランティアが参加し、事前の準備、イベントの運営、そして後かたづけと、数ヶ月間に渡ってお手伝いをしてくれました。

昨年までは2日間で行っていたイベントですが、今年は1日にまとめ、横田基地中学校の校庭では、50m走、100m走、ソフトボール投げ、400m走など、また少し離れた施設でも、ボーリング、水泳、バスケットボールなど、8つの競技を行いました。4時半にすべての競技が



Ex-Chief Dir. Hirose, JAAGA, received a souvenir from Col. Epick, 374 Airlift Wing.

終了した時は、選手もボランティアのみなさんも、きっとくたくただったと思いますが、誰一人怪我や具合が悪くなることもなく、日ごろの練習の成果を思いっきり発揮できた1日だったと思います。

大会名誉会長として、第374業務支援群司令官、ラファエル・ケサダ大佐、また福生市からは加藤育男福生市長がご出席され、各部隊からも、最上級曹長、上級曹長たちがパレードの先導として参加して下さいました。また横田基地の儀典兵の儀式、プロの歌手のキャロル・ギャズデンさんの素晴らしい国家独唱にも、みなさん感動されたことと思います。

JAAGA、日米エアフォース友好協会からは、廣瀬理事と阪東理事にご出席いただきました。JAAGAからは数年前より多大のご寄付をいただいています。スペシャル・オリンピック委員会は、横田基地に勤務する兵隊さんを中心に構成された、100%ボランティアの非営利団体なので、毎年みなさまのご寄付によってのみこのイベントを運営しています。ですから、ふとしたことがき

かけで、今年の副会長に就任された榎様と知り合ってから、毎年いただいているご寄附は、選手たちの保険、食事、記念品、メダル、参加者が全員で使用する飲み水、簡易トイレなど、なくてはならない備品などに使わせていただいています。大勢の参加者を迎えるにあたり、こういった設備や備品を用意するのは、多大な時間、費用がかかります。それを大きく助けて下さっているご寄附に、スペシャル・オリンピックス委員会一同、心から感

謝しています。

また来年も大勢の選手たちを迎え、楽しく、勇気もらえる1日を過ごしたいと思っています。ありがとうございました。また、よろしくお願ひします。

佐藤 直子 : 関東スペシャル・オリンピックス委員会
通訳、司会、DV担当

— スペシャル・オリンピックス (三沢) を支援 —

猛暑の続く8月28日、三沢スペシャル・オリンピックスが三沢基地内の格納庫において開催された。三沢基地周辺の3団体から選手74名、付添い23名が招待された。主催者側の米空軍は三沢基地の副司令ウイマー大佐以下約350名がボランティアとして参加された。競技種目等は例年並みであった。猛暑の中での競技が運営されたため熱中症の発生等も心配されたが、何事も無く全ての競技を終了した。当協会は三沢スペシャル・オリンピックス委員会に支援品を贈呈した。

(丸山三沢支部長記)



Mr. Maruyama, Head of JAAGA Misawa branch, hands a gift to Col. Wimmer, Committee of Misawa Special Olympics.

米軍人のねぶた祭参加を支援

8月6日19時~21時の間、青森市において、米三沢基地司令グレッグ大佐以下35名とJAAGA三沢支部丸山及び山本(親)事務局長の家族5名、計40名が青森市の協力を得て、東北最大の祭りであるねぶた祭に参加した。当日は、連日の猛暑の中、三沢をバスで出発し、青森市に到着した。一行は祭りの衣装に着替えた後、基地司令とJAAGAメンバーが鹿内青森市長を表敬して親しく懇談した後、山車の運行に参加した。山車の運行中は暑さも忘れて「ラッセラー、ラッセラー」のかけ声とともに跳ねて日本の祭りを堪能し、参加者全員大満足であった。

(丸山三沢支部長記)



Nebuta Festival in Aomori city: 35 American people, including Col. Greg, ex-Vice Commander of Misawa Air Base, took part in the festival.

SPORTEX '10A 開催



Participants of Sportex'10A : 75 Japanese and Americans compete in the golf game.

10月7日(木)、SPORTEX'10Aが米軍多摩ヒルズ・ゴルフ・コースにおいて開催された。JAAGAからは津曲会長をはじめ正会員及び賛助会員の計52名、米軍からはアンジェレラ第5空軍副司令官以下スタッフ等23名が競技に参加した。

5時過ぎから参加者が集合し、クラブハウスでの朝食、ドライビング・レンジでの練習の後、6時半から開会式が行われた。

津曲会長からは、「ライス司令官が公務のため来られないことが残念ですが、素晴らしい天候の中、皆で楽しくやりましょう」との挨拶があり、また、アンジェレラ副司令官からは、「ライス司令官に代わってお礼申し上げます。前回のスポルテックスは、良い天気ではありませんでしたが、今日は良い天気です。皆さん楽しんで下さい」との挨拶があった。さらには、賛助会員を代表して淵上会員から「皆様にとり最良のスコアが出るように、そして素晴らしいコンペになるように祈っています」との挨拶があった。

開会式後、それぞれのカートに日米混合で乗りスタートホールへ移動し、7時、ホーンの合図で一斉に競技が

開始された。各参加者は日頃鍛えたゴルフ技術を競い合いながらも、和やかな雰囲気の中で競技を楽しんだ。競技終了後は、プレーの反省も含め、歓談しながらの昼食となった。

昼食後、表彰式が行われ、優勝(佐々会員)、準優勝、第3位、飛び賞、ブービー、ベスト・グロス、ドラゴン、ニアピン各受賞者に賞品が、また、会長、副司令官からは、それぞれ特別賞が贈られた。閉会にあたり、会長からは、「素晴らしい天候のもと、第5空軍と多摩ヒルズ・ゴルフ場関係者の多大なる支援を得て、素晴らしい一日を送れたことを感謝しています。司令官、副司令官とも、ワシントンに行かれてもいつの日かまた一緒にプレーをしたいと思っています。」との挨拶があった。また、副司令官からは、「日本で最後のスポルテックスになりました。日本に来てJAAGAの皆さんと一緒にゴルフとか会議とかに参加できたこと、大変誇りに思っています。有難うございました」との挨拶があった。最後に、蓑田会員から「今後もこういった楽しいコンペができるように日米同盟を深化させて頂ければと思っております」との挨拶があり、SPORTEX'10Aは盛会裏のうちに終了となった。

(源理事記)

横田基地司令にフェザー大佐が着任

5月14日(金)、横田基地司令兼第374空輸航空団司令の交代式が在日米軍兼第5空軍司令官ライス中將を執行官として横田基地格納庫で実施された。

空自から府中基地司令及び入間基地司令が参加され、JAAGAから廣瀬理事長(当時)、山本(隆)、新井、阪東理事が参加した。ライス中將から離任されるヒックス大佐の横田基地における実績とリーダーシップに対する賞賛と後任のフェザー大佐への激励の挨拶があり、その後ヒックス大佐に対し勲章が授与された。ヒックス大佐の離任挨拶の後、指揮官旗の引継ぎによる指揮権継承の儀式が執り行われた。引き続きフェザー大佐の着任挨拶があり、格納庫前に駐機した指揮官機のC-130の名札が付け替えられ、無事式典が終了した。

式典の後、将校クラブにてレセプションが行われ、新団司令フェザー大佐と親しくお話をすることができた。フェザー大佐は飛行時間3,900時間以上を有するC-130の



Reception of new commander of Yokota Air Base : Col. Feather and his wife (center), Dir. Arai (left) and Momoki (right), JAAGA

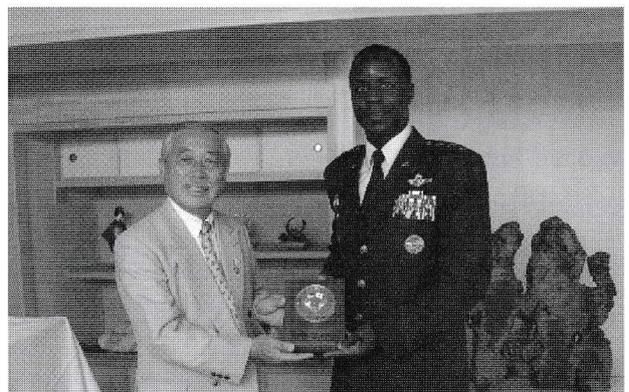
上級操縦士である。またクウェートのアリアルサレム空軍基地に勤務され、そのときに自衛隊を支援した経験があり、海外運航などで空白の良き助言者となってくれることが期待される。

(桃木理事記)

ライス中將に名誉会員を委嘱

10月19日(火)、在日米軍司令官兼第5空軍司令官エドワード・ライスJr.中將にJAAGA名誉会員を委嘱するため、津曲会長、阪東、高橋(健二)、桃木、源理事が横田基地を訪問した。委嘱の行事は、横田基地オフィサーズ・クラブにおいて、ライス司令官との昼食会を兼ねて行われた。会長から名誉会員の証としての記念の盾が司令官に贈られ、司令官からは、「JAAGA名誉会員になることは光栄に思います。お礼申し上げます」との言葉があった。

阪東理事の乾杯の発声で食事が始まり、笑いの絶えない和気あいあいとした雰囲気の中となった。今年9月の訪米時のJAAGA名誉会員との交流のこと等、広範囲の話題で盛り上がり、あっという間に1時間が過ぎてしまった。会長から「お忙しいところ昼食会に参加して頂いて有難うございます」との感謝の意が述べられ、司



President Tsumagari hands a shield of honorary member of JAAGA to then Lt. Gen. Rice.

令官からは「今日はどうして離日前にゆっくり時間を取れ、一緒にさせて頂いて有難うございます。盾はしっかり持ち帰って飾っておきたいと思います」との挨拶があり、昼食会は終了した。

(源理事記)

米国独立記念祭に参加



U.S. Independent Day Festival in Yokota : JAAGA directors, their wives and Col. Feather

7月3日(土)、横田基地において、2010年米国独立記念祭が第374空輸航空団司令フェザー大佐主催により行われた。本行事にJAAGAから香川理事長、阪東、源理事が参加した。空自からは、府中基地司令、准曹士先任等が参加されていた。

第15番格納庫では、「AF Band of the Pacific」の演奏が行われる中、米軍人とその家族、招待者等とともに、

音楽と食事を楽しんだ。演奏終了後、フェザー大佐から、来場者への歓迎、独立記念日への祝福、そして、ボランティアの皆さんへの感謝の気持ちを表す挨拶があり、会場から歓声が沸きあがっていた。

午後4時くらいから2時間ほどの参加であったが、横田基地の皆さんとともに米国独立記念祭を堪能した。

(源理事記)



AF Band of the Pacific : People enjoyed their musics in 15th hangar.

横田基地日米友好祭に参加



An idol of Japanese-American Friendship Festival in Yokota : F-22

8月21(土)・22日(日)横田基地において日米友好祭が行われた。5月に着任されたフェザー大佐初の航空祭

であった。猛暑の中であったが天候にも恵まれ、最新鋭のF-22ラプター2機他日米の航空機の展示、屋外ステージ・野外ステージでの各種催し物、3 on 3バスケット、バイク・ショーなどのイベントが行われた。下士官クラブで行われた本友好祭のレセプションに山本(隆)、阪東、桃木理事夫妻が参加した。航空自衛隊から府中基地司令や関係准曹士先任が招待され、友好を深めていた。レセプションでフェザー大佐から皆さんに対する日ごろからのお礼と多摩飛行場が出来て70年、横田基地となって65年、日米安保50年の記念すべき年であることが紹介された。

(桃木理事記)

三沢基地エア・フォース・ボールに参加

空軍創立63周年記念晩餐会（エア・フォース・ボール）が9月25日（土）に米空軍三沢基地において、第35戦闘航空団司令のラストーン大佐の主催で行われ、三沢支部の丸山支部長が夫婦で参加した。当日は、三沢らしい小雨の肌寒い天気だったが、来賓として三沢市長はじめ市の関係者、北空司令官をはじめとする自衛隊関係者、CTF72副司令をはじめとする米海軍関係者、そして太平洋空軍司令官ノース大将が出席されて午後6時から、三沢基地内下士官クラブにおいて盛大に実施された。基地司令の挨拶の後、乾杯、食事、ケーキ・カットと続き、最後に太平洋空軍司令官の日米安保条約締結50周年記念についてのスピーチがあり、閉会となった。スピーチの中で司令官は太平洋地域の平和と安定のために日米同盟

が重要であると力説された。

（丸山三沢支部長記）



Misawa Air Force Ball : Mr. and Mrs. Maruyama, Head of JAAGA Misawa branch and Col. Rothstein and his wife

正会員の横田基地研修



JAAGA members heading for Yokota Air Base by bus

9月15日（水）、中司 崇団長以下15名の正会員が参加し、横田基地研修が実施された。研修は、代表による第5空軍副司令官アンジェラ少将への表敬（司令官不在のため）、5空軍ブリーフィング、基地外周バス・ツアー、昼食会、第374空輸航空団ブリーフィング、航空機見学（C-130、C-12、UH-1）の順に実施された。第5空軍ブリーフィングでは、第5空軍の編成組織等のブリーフィングに加え、航空総隊司令部の横田基地移転にかかわる施設工事の状況についても説明があった。ほぼ完成している総隊司令部の庁舎は、第5空軍司令部庁舎と地下通路でつながっており、アンジェラ少将によると、地下エリアは、世界一級品のAOC（Air Operation

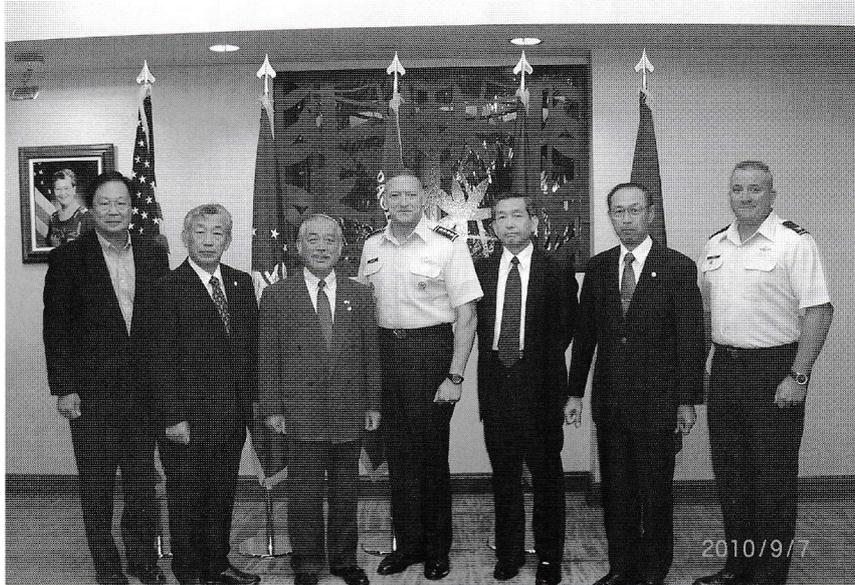
Center)を予感させるに十分なスペースであるとのことであった。また、今回の横田基地の施設整備は、すでにある米空軍施設の移設と、府中から移転してくる部隊を受け入れるための新たに建設する施設整備を同時並行的に進捗させる必要があるため、苦心しており、三沢基地のように基地の中に基地を作るのではなく、『日米で共同で仕事ができるように』を主眼に置き、「米軍将官官舎の近くに空自将官官舎を建てる」、「米軍隊舎の近くに空自隊舎を建てる」等の、いろいろな工夫をしているとのことであった。第374空輸航空団ブリーフィングでは、横田基地の歴史や名前の由来等の説明があり、興味深い話を聞くことができた。

（山本（康）理事記）



Aircraft tour, in front of C-130

「つばさ会／JAAGA訪米団」に参加して



JAAGA members, including President Tsumagari, and Gen. North, PACAF, in Hawaii

平成22年度の「つばさ会／JAAGA訪米団」は、津曲 JAAGA会長を団長として、永岩副理事長、堀理事と筆者の計4名で9月6日から17日までの間、ワシントンDCでのAFA年次総会への参加に併せて太平洋軍、太平洋空軍司令部、13空軍（以上ホノルル）、宇宙空軍司令部、第50宇宙空軍、空軍士官学校（以上コロラド・スプリングス）、および国防省関係（ワシントンD.C.）を訪問した。

この間、多くの現役高官とともに、退役されたJAAGA名誉会員との交流を通じ日米相互の親善と更なる友情を深めるとともに、米軍等の現況および趨勢を把握することができた。

最初の訪問地ハワイでは、日本勤務の経験が長く、つばさ会／JAAGAの活動に理解の深い太平洋空軍司令官ノース大将の計らいで、第13空軍司令官カーライル大将の手厚い接遇や太平洋空軍司令部運用計画部長ケルツ准将の専従のエスコートなど、温かなもてなしを受けた。PACOM、PACAF、第13空軍等を訪問し、その任務や現況、今後の方向性などについてブリーフィングを受けるとともにこれらに先立っての司令官表敬では率直かつ忌憚のない意見交換をすることができた。これらを通じ、

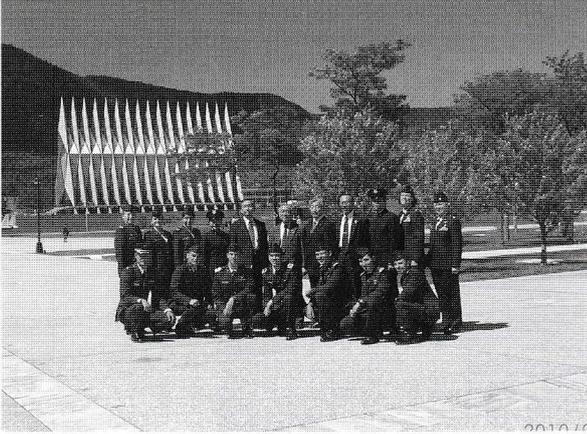
長年に亘って築き上げてきた日米の空軍レベルの信頼が、いかに強いものであるかを確認するとともに、さらに一層の強化・発展がなされつつあることを確認できた。

意見交換では、西太平洋地域の現況、日米の防衛力整備の状況、共同訓練や情報交換を通じて築き上げている絆の一層の深まり、そして何より相互が「グレート・パートナー」と認識し合っていることなどが話題となった。特にノース大将は日米間の相互運用性のさらなる強化を図ることの大切さを強調していた。

また、連絡幹部の北村2佐、上垣2佐の積極的かつ綿密な事前調整や滞在間のきめ細かなエスコートなど献身的なご支援を頂いた。

コロラド・スプリングスでは宇宙空軍及びその隷下部隊、空軍士官学校を訪問。宇宙空軍では、司令官ケーラー大将を表敬。次いでコマンド・ブリーフィングでは作戦室で各部長も参加し、新たな国家宇宙ポリシーのもと運用されている宇宙空軍の役割や主要な課題などについて丁寧に説明を受けた。質疑では司令官自ら率直に対応して頂いた。

宇宙空軍は将来の戦いにおける新たな二つの領域、宇



JAAGA members and cadets learning Japanese in USAF Academy, Colorado Springs

宙とサイバーの双方に責任を持っていること、航空も含めた三つの領域の調和と統合が重要であること、そして任務を行うに当って今後は国際協力の強化が重要になること、さらにそのための人材養成が肝要であることなどをケーラー大將は強調していた。軍の装備品の多くの分野で深く宇宙関連機能が入り込み、あらゆる作戦を宇宙が支援していることや、平素から民間分野をも積極的に支援しており、宇宙空軍の重要性は今後一層高まるであろうことから、今回この部隊を訪れ、絆を深めたことは大きな意義があったと確信する。

また、宇宙空軍では、同じコロラド・スプリングスにあるシュリーバー空軍基地も訪れ、宇宙職域の要員養成や宇宙関連装備品の改善を行うSIDC (Space Innovation and Development Center)、宇宙機能を実際に運用している第50宇宙空軍、その隷下部隊でGPSや衛星通信を24時間体制で管理・運用している部隊を訪問し、その状況を視察した。視察に当ってカメラや携帯電話はもちろん電子辞書のような電子機器まで持込が禁止されるなど厳しい保全態勢の中で、丁寧な説明を受けることができた。このような宇宙関連地上システムは今後わが国が宇宙機能を導入していく際に一つのモデルとなるものであり、空自も関係が必要となる部隊である。

一方、澄み切った青空と爽やかな空気のもと、広大なキャンパスを有する空軍士官学校では、学校長ゴウルド中將以下の温かな歓迎を受けた。昼食時、4,000名余の学生が一堂に会する食堂では、当日の訪問者として紹介されて全学生からの歓迎を受け、防衛大から短期留学できている2名の学生を始め、日本語を選択している学生達

と会食、その後、一年生の日本語授業風景を参観して懇談する機会も得た。日本語教育の教官には航空自衛隊指揮幕僚課程修了者がおり、自信を持って学生を教育している様子を参観し、日米空軍間の人材交流の成果を見ることができた。また人工衛星を独自に設計、打上げている教室の状況、学校の概況ブリーフィング、教育部長や学生部長達との懇談など盛りだくさんに準備してくれた計画をこなした。ゴウルド中將からも日米の士官候補生の相互短期留学や日本の交換連絡幹部の派遣によって日米空軍が相互理解を深めるとともに良い成果を挙げているとの説明を受けた。交換連絡幹部阿部3佐にはデンバー、コロラド間約1時間半に亘る送迎を始め、士官学校訪問の準備や調整を始め現地での各種支援など広範な分野で支援を頂き、この地域での研修が実り多いものにできた原動力であった。

ワシントンでは米空軍協会 (AFA) 年次総会への参加、ペンタゴン各部署への訪問、そしてJAAGA名誉会員である歴代第5空軍司令官との交流を実施した。

退役、現役軍人などを中心として約12万5千人の会員を有するAFAは、軍事産業とも一体となって空軍の活動を支援し、国民への広報や教育を行うことを目的とした全米各地に支部を有する全国的組織であり、機関雑誌「Air Force Magazine」などを通じて我々にもなじみが深い。今年の年次総会は昨年に引き続いてワシントン郊外の会議センターで、将軍から下士官に至る退役・現役軍人、政府関係者、軍事産業関係者など3日間約6,000人が参加して催された。幅広いテーマについて、現役の



JAAGA members and Michael M. Dunn, President of AFA, in Washington



JAAGA members and Lt. Gen. Poss, ASO

指揮官、退役の経験者、有識者などが講師に招かれ活発かつ率直な意見交換がなされていた。併せて広大な展示ホールで軍事産業界がシミュレータや精巧なモデルを持ち込み最新の航空宇宙関連技術を展示しており、世界に君臨するエア・パワーの根源と将来を垣間見ることができた。途中、AFAのダン会長を表敬・懇談したが、三沢勤務の経験もある会長から歓待を受け、米空軍60周年記念としてアーリントン墓地に隣接する高台に空軍メモリアルをAFAが寄付によって建設したことなど最近のAFAの活発な活動状況を伺うことができた。

ペンタゴンでは、空軍省東アジア太平洋担当シーファーク国防次官補代理、統参本部J 5 アジア担当副部長ニューエル准将（元横田基地司令）、空軍参謀本部A 3/A 5 担当部長ブリードラブ中將、A 2 X 担当部長ボス中將を訪問し、米国のアジア政策、米空軍の現状、運用構想などの話を伺うとともに、アジア太平洋地域の最近の軍事情勢等について説明を受け、意見交換を行った。

それぞれの方々が異口同音に、日米間の絆が堅固であること、最近の東アジア情勢が厳しいこと、今後とも関係国が一層協力し合う必要があることなどを強調していた。

さらに日本大使館に藤崎大使を訪問し、忙しいスケジュールの中、時間を割いて温かく迎えてもらい懇談する機会を頂いた。

ワシントンでは毎年、元第5空軍司令官経験者の方々により温かく訪問団を接遇して頂いているが、特に今年は5月に「在日米軍同窓会」が設立され、日米間の堅固な同盟パートナーシップ維持のための基盤として草の根

レベルの交流を一層促進させる大きなマイルストーンの年であり、恒例となった夕食会にもマイヤーズ元統参本部議長夫妻を始め、フロリダからホール中將、テキサスからヘスター大將夫妻、ノースカロライナからワスコ大將夫妻、そしてワシントンに在住のエバハート大將夫妻、ライト中將夫妻と、JAAGA名誉会員のほとんど皆さんが駆けつけてくれ旧交を温めとてもなごやかなひとときを過ごした。特にエバハート大將ご夫妻には訪問団の受入準備や名誉会員の皆さんへの連絡調整などに尽力されるとともに、皆さんをご自宅のホームカクテルに招いて頂き一方ならぬお世話を頂いた。

今回の訪米の総合的な調整と、ワシントン滞在間の公私に亘るあらゆる支援に関して、在米大使館航空防衛駐在官尾崎1佐と齊藤2佐に多大なご尽力を頂いた。本訪米を成功裡に終えることができたのもお二人の綿密な調整と支援のお陰であった。

今年は日米同盟50周年の節目に当る年であるが、両国間の間には普天間問題を始め懸案が多い現状である。しかし、米空軍現役・OBの間では、日米同盟の重要性がしっかりと認識され具現されており、これまで諸先輩方が築いてこられた日米空軍レベルの絆の強さを再確認するとともに、さらなる人脈形成の重要性及び具体的な努力の継続が必要との認識を得た10日間であった。

終わりにあたり今次訪米に際して各方面で協力・支援して頂いた関係各位に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

(小川理事記)



at the Air Force Memorial in Arlington, Virginia

米国防省2010年「4年毎の国防計画見直し」について

寄稿者：織田邦男理事



US Army soldiers carrying out antiterrorism operation

1 はじめに

今年2月、米国防省は「4年毎の国防計画見直し」(QDR: Quadrennial Defense Review) (以下「QDR」)を議会に提出した。5月には国家安全保障戦略が公表された。オバマ政権の米国戦略の全貌がようやく明らかになりつつある。

QDRは「軍隊の戦力構成見直し法」(96年発効)により、4年毎に米国防長官が国防計画・政策を包括的に見直し、議会に報告書を提出することが義務付けられたものである。

今後20年間に予想される安全保障上の主要課題を総点検し、地域的な安全保障上の課題や調達すべき兵器体系、人的戦力の課題などに対し、何を優先し、何を行うかを提示するものであり、4年間の国防省施策の根拠文書といえる。

日米同盟は日本にとって死活的に重要である。同盟国たる米国の戦略を知ることは、日本にとって最低限必要であり、QDRはその手助けとなる良き参考書である。紙幅の関係上、要点を絞って紹介してみたい。

2 2010年国家安全保障戦略について

2010年QDRについて述べる前に、上位の国家安全保障戦略について触れておきたい。米国の安全保障に係わる戦略体系は、ゴールドウォーター・ニコルズ法によって国家安全保障戦略、国家防衛戦略、国家軍事戦略の作成、報告が義務づけられており、それぞれ、大統領府、国防省、統合参謀本部が担当する。

最も上位の2010年国家安全保障戦略は2010年QDRが公表された3ヵ月後の5月27日に公表されており、体系的には上位にあるが、時系列的には2010年QDRに反映される形にはなっていない。

従来、国家安全保障戦略は、軍事も含めた対外政策を中心とした安全保障政策の方向性を示すものだったが、オバマ政権初となる国家安全保障戦略は財政赤字や教育、移民政策まで含めた包括的な戦略文書となっている。

「軍事的な優位性は維持しているものの、過去数年、米国の競争力は後退している」との危機感を示し、国際的な影響力を保持するためには国力増強が必要、なかんずく「力の源泉」たる経済の再生が重要とし、財政赤字の削減や、教育、科学分野への投資、医療保険負担の軽減等に取り組む姿勢を強調しているところが特徴である。

ブッシュ・ドクトリンの「先制攻撃」を排除し、「衝突回避、平和維持のため」に外交、国際機関等を活用し、できる限り「武力行使の必要性を回避する」と明記した点はオバマ色を色濃く反映している。

BRICsといわれるブラジル、ロシア、インド、中国に加え、南アフリカ、インドネシアなどとの関係強化を重視するとしつつも、中国については軍事力近代化を警戒しながら、責任ある指導的役割を果たすことを歓迎するとし、また「非対称脅威」に対抗する能力を強化し、通常戦力の優位性を維持するといったトーンは2010年QDRに共通している。

3 2008年国家防衛戦略について

2010年QDRは体系的には2008年国家防衛戦略を受けて策定された形となる。だが、2008年国家防衛戦略は政権交代まで半年しかない時期にブッシュ政権によって公表されたものである。

新大統領に代わっても、米国が直面する課題は変わらないし、米軍が取り組んでいる対テロ戦争に対する方針に大きな変更はないとゲイツ長官が判断したと思われる。

結果的にはゲイツ長官がオバマ新政権でも留任し、切れ目なく国家防衛戦略は継承され、2010年QDRに繋がっている。政権交代があっても国防戦略にブレがないところが米国の強みである。

2008年国家防衛戦略では脅威認識を新たにした。従来、脅威を伝統的、非正規型、混乱型、破滅型の4つに分類していたが、脅威は4つに分類できるほど単純ではなく、一つの紛争でも上記4つの脅威を包含している場合もあるとし、4分類を不採用とした。「不安定の弧」の用語についても使用されなくなった。

戦時であるという現状認識、現代の脅威に対しては一国では最早対処不可能であること、しかも軍のみならず文民の力も借りた統合的な体制でなければ今後の危機に

対処できないという認識は、2010年QDRにそのまま反映されている。2010年QDRでは「バランス」という言葉が目立つが、2008年国家防衛戦略から強調され始めたものである。

4 QDRの変遷

(1) 1997年QDR

1997年QDRでは安全保障環境を「依然として危険で高度に不確実」とし、地域的危険としてイラン、イラク、北朝鮮を挙げ、大規模越境、破産国家がもたらす不安定性国家としてソマリア等を挙げていた。

先進技術、NBC兵器の拡散を重大な懸念として位置付け、国家横断的（transnational）危険として、大量破壊兵器拡散、テロ、小規模紛争を挙げた。また2015年以降のロシア、中国の台頭の可能性に懸念を表明したことも特徴的である。同時多発テロで市民権を得た「非対称脅威」の用語も初めてここで登場している。

「関与及び拡大戦略」が示されたのも1997年QDRの特徴である。地域安全保障の施策としては、日本、韓国、豪州との同盟関係の強化を謳い、特に日米同盟はグローバルな目標達成の為の要（Linch-pin）とし最重要視していた。

(2) 2001年QDR

2001年QDRはテロ発生直後の9月30日に公表された。冷戦後の90年代を通じ、「封じ込め戦略」から「関与及び拡大戦略」へ、「対ソ戦略」から「地域戦略」へ、そして「相互確証破壊戦略」から「柔軟即応戦略、融合戦略」へと戦略転換がなされた。同時に米国単独主義が形成されたが、2001年9月11日の同時多発テロにより、戦略の大きな転換が迫られた。

だが、テロ直後ということもあり、2001年QDRでは所要の修正、検討が間に合わず「時間切れ、とりあえず」の感が強い。

特徴的なところは、同時多発テロ直後でもあり、「非対称脅威」を「戦争」に格上げし、「米国本土防衛」を最優先事項としたこと、そして「国土安全保障局」新設に言及した点である。また国防力整備にあたっての考え方を「脅威ベース」のアプローチから「能力ベース」へのアプローチへの転換を図ったことも大きな特徴であった。

(3) 2006年QDR

21世紀に直面する脅威は、非正規型、混乱型、破滅型脅威の蓋然性が高く、伝統的脅威対応型の国防力をこれらの重点に向かってシフトしていくべきとの認識を示した。

「戦略的岐路にある国々」については、インド、ロシア、中国など台頭しつつある国家に対し、発展や民主化努力への協力を押し進めつつ、敵対勢力にならぬよう誘

導に努める。同時に、紛争防止に失敗する可能性に対しても準備（ヘッジ）しておく必要があるとした。

特に中国については脅威とは言わないが、抑制された表現ながら警戒心を顕にした。中国は米国と軍事的に競合する潜在的可能性が最も高い国家であり、世界における責任ある利害共有者（Responsible stakeholder）として誘導する（Shape the choices）。中国は戦略的岐路（Strategic crossroad）に立っており、太平洋軍の増強によって軍事的無頼漢になるのを避けるためのヘッジ戦略を採るとした。

兵力整備については、“One size fits all”から“Tailored”への移行、つまり「大は小を兼ねる」型戦力から、多様な事態に適切に対応できる「テラーモード」型戦力への移行を明示した。

5 2010年QDRの特徴

(1) バランスの見直し

2010年QDRでは「バランスの見直し」（rebalance）という言葉が目立つのが特徴である。「バランスの見直し」を強調するという事は現状がバランスを欠いているとの認識、あるいは将来致命的なアンバランスに陥る可能性があるとの危機感の表れである。

「バランス」は2008年国家防衛戦略で強調され始めた。記者会見でゲイツ長官は「この国家防衛戦略を一言で表すと『バランス』である」と述べている。

米国は戦時下の（nation at war）認識が必要と指摘する。今回のQDR全体の文脈から窺えることは、足掛け9年に及ぶテロとの戦いによって米国の安全保障政策が歪みつつあるという危機意識である。

財政面での負担は重く、2010年2月議会に提出した国防予算要求では約7,000億ドル、テロとの戦いの海外事態対処作戦予算は約1,600億ドルにも上る。人的負担も大きく志願制を維持するためには適切な海外展開期間の管理が求められる。兵員募集については資格年齢の引き上げでなんとか対応しているが質の低下など問題が多い。

オバマはイラクからは2011年末までに米軍を全面撤収



F-18 taking off from the aircraft carrier, George Washington

することを決めたが、アフガンでは状況は予想以上に深刻であり3万人増派した。

この様な背景のもと、テロとの戦争を勝利するのを最優先としつつも、将来的な備えとのバランス、戦略目標とリスクとのバランス、あるいは伝統的脅威への備えと非正規戦能力向上とのバランスなどの見直しなどが急務であり、優先順位を定めて課題に応えるとした。

装備面でもF-22戦闘機生産終了、C-17輸送機調達終了、新しい空母調達の延期(stretching out)、CG(X)巡洋艦計画中止等、目玉事業に大鉈が振るわれ、より優先度の高い分野への資源再配分を提示した。

現代の課題は米国単独では取り組めないとの基本認識は2006年QDRと同じであるが、同盟国、友好国との協力、国内にあっては他省庁との協力が欠かせないことを2006年QDR以上に強調している。

(2) 「アクセス拒否」と「サイバー空間」への対応

「アクセス拒否下における攻撃抑止と打破」(deter and defeat aggression in anti-access environments)と「サイバー空間における効果的作戦」(operate effectively in cyberspace)がクローズアップされた。

「アクセス拒否」とは敵対国家による侵攻を抑止、打倒するための作戦行動や重要地域への戦力展開を阻止する行動をいう。「アクセス拒否」、「サイバー」共に中国を念頭に記述されているのは明白である。

「ネットワーク侵入」「対衛星兵器」「基地、海洋及び航空資産、それらを支援するネットワークを脅かすように設計されたシステムに対する投資拡大」など、最近の趨勢に警戒感を示し「将来の敵は航空、海洋、宇宙、サイバー空間の支配を競う、あるいは拒否するような高度の能力を保持するだろう」と指摘している。

「サイバー」への取組については、現在でも日常的に受けているサイバー攻撃の実態に言及した上で、サイバー対処に係わる組織文化の改善や他省庁、関連企業、友好国との協力関係拡大といった包括的アプローチを強調すると共に、サイバーコマンド創設や教育訓練についても言及している。

(3) 中国への対応

中国に関する記述については、国名を出した箇所では記述振りが抑制的なのが今回の特徴である。2006年QDRでは中国の軍事近代化の透明性に警戒心を色濃く出し、中国を名指しした上で「最大の軍事的な潜在的競争国」とまで言及して警戒心を顕わにした。今回のQDRではこのような表現は消えている。

2008年国家防衛戦略では中国には「選択肢の形成とヘッジ(shaping and hedging)で対応」とあり、2006年QDRと同様、ヘッジ戦略を提示していた。中国を名指しし、

軍事的無頼漢になるのを思いとどまらせる為に軍事力増強には太平洋軍の増強によって、能力強化には能力強化で応え、米国との軍事競争に走ることを抑制させるとしていた。

2010年QDRではヘッジ戦略の必要性については言及されているが、中国を名指ししたヘッジ戦略の記述はない。

中国の軍事力について、中距離弾道ミサイル、巡航ミサイル、攻撃型潜水艦、遠距離防空システム、電子戦・コンピューター・ネットワーク攻撃能力、新世代戦闘機、対衛星能力の整備などを列挙した上で「軍事力拡大の真意や意思決定プロセスにおける透明性欠如」への疑念、あるいは「目的について限定的な情報しか共有せず、長期的な意図に関して多くの疑問」が生じているとの警戒心を示す。

警戒感を示しながらも抑制された記述振りは中国との関係を傷つけないというオバマ政権の思惑であろう。

「アクセス拒否/地域拒否」(anti-access/area-denial)能力については、今回のQDRでも14箇所にもわたって記述されている。

「アクセス拒否」に対する対応能力保持が紛争防止・抑止に必要とし、このためには同盟国・友好国の協力、そして米軍の態勢強化が必要と指摘している。具体的な強化策として、遠距離打撃能力、対潜能力、前方展開基地の抗湛性、宇宙へのアクセス、利用確保、C4ISR、敵センサー・システム攻撃、米軍の海外プレゼンス等を挙げている。

目新しいのは「統合空海作戦構想の構築(develop a jointair-sea battle concept)」である。持てる戦力を有効に活用するための統合作戦に言及した点は2010年QDRの全般トーンに合致したものである。

(4) 同盟関係について

戦略目標を達成するため、海外にあっては同盟国、友好国と、国内にあっては主要カウンターパートとの緊密な連携の必要性を強調する。

同盟の中でも、「米国の安全保障の中心は、大西洋を挟んだ強力なパートナーシップ」と述べるように、欧州との関係重視を鮮明にする。特に英国との関係は、「歴史と国益の共有により、不動の結束(steadfast bond)を形作っている」とし、アフガン、イラクの作戦を通じ「近年、関係は強化されている」ことを強調している。

日本に対する記述は4箇所にも留まり、日本に対する期待値は明らかに低下した記述振りである。政権交代以降の同盟関係が反映されているのであろう。北東アジアの安全保障について日本、韓国を同列に扱い、一くくりで述べているところにオバマ政権の対日姿勢が表れているようだ。

普天間移設関連では、「米軍の長期プレゼンスを確固」

たるものにし、「アジア太平洋地域の安全保障活動のハブとなるグアムへの米軍移転を進めるための『二国間の再編に関するロードマップ』の履行を継続する」と淡々とした記述に終わっている。

(5) 戦略転換について

今回のQDRで示された大きな戦略転換は、「1-4-2-1」戦略^(註)からの完全撤退である。戦力規模や構成の算定に際し、これまでは「ほぼ同時に2つの大規模地域紛争を戦う(win two major regional conflicts in overlapping time frames)」ことを基準に検討がなされてきたが、この手法は「もはや不適切である」とし、「2正面戦略」からの決別を宣言している。

戦いは計画した通りに行われるほうが稀であることを「痛ましい経験を通じて(through painful experience)学んだ」とし、戦いの様相、期間、烈度は様々であり、全ての事態が国益に同程度の脅威を与えるとは限らない。柔軟性は必要だが、これも全部隊に画一的、均一的に求められているわけではない。従って将来予測される重大な影響のある複数のシナリオの組み合わせを基に検討をしたと説明する。

この箇所の表現が婉曲、曖昧であるため「多様な脅威に対応できる柔軟な態勢を確立するものであり『2正面戦略』は維持される」と解釈する向きもある。だが、戦力規模、組成、そして評価の基準となる「2正面戦略」を「もはや適切でない」と切って捨て、ダウンサイズの実相を見ると、冷戦後、一貫してきた「2正面戦略」は完全放棄されたと見るべきであろう。曖昧、婉曲な表現はコミットメントを約束する同盟国に対する政治的配慮と捉えるべきであろう。

(6) その他の特徴

「兵士のケア」について手厚く記述されていること、そして「気候変動、エネルギーへの取組」が言及されたことも2010年QDRの特徴である。

足掛け9年にわたるテロとの戦いは多くの負傷兵を出し、そのケア如何によっては志願制の根幹が揺らぐとの危機意識を示す。負傷兵のケアは最優先課題である。また約40万人の米兵が海外展開している現状に鑑み、海外展開頻度の適正管理や家族支援についても具体的に提示し、募集と継続任用に関しても言及している。

心的外傷ストレス、外傷性脳障害、戦闘ストレス、薬物乱用、アルコール中毒、自殺の増加等の深刻な現状を示し、対応が最優先されなければならない、この投資が今日及び将来の国家安全保障において配当をもたらすと述べている。

「気候変動」について、QDRで言及されるのは今回が初めてである。気候変動それ自体では紛争の原因にはな

らないが、自然災害、飢餓、水不足、病気の蔓延、環境悪化は脆弱な政府を更に弱体化させ、不安定化または紛争を助長する可能性がある。加えて北極海の水域がオープンになる可能性があり、北極海における通信、領域認識、搜索救助、環境観測などの不備、不足に取り組む必要があると指摘する。

「エネルギー」については、再生可能エネルギー供給の増加、バイオ燃料の利用、ハイブリッド車両や電気自動車の導入、電動水上艦の就役等の記述があるが、今後の具体的な施策が注目される。

6 おわりに

2010年QDRと国家安全保障戦略に通底するのは、長引く戦争による国力の衰退、競争力後退の危機感である。足掛け9年にわたる「長期にわたる戦争(long war)」はボディブローのように重く押し掛かり、米国の国力を衰退させている。加えて国内の経済不振、財政赤字等が問題をより深刻にしている。

軍事的優位性は維持しているものの、中国の台頭もあり、中長期的には軍事面で群を抜いた地位を維持できるかどうか危うくなりつつある。現在の戦争に勝つのは至上命題だ。だが、将来にわたっても米国が指導的立場に立たねばならぬ。2010年QDRは、このジレンマが滲み出ている。

日米同盟なくして安全保障政策は成り立たない日本の現状を鑑みると、米国の苦境を理解し、緊密な調整と連携のもと、責任を分担し、任務と役割を適切にして日米同盟を再度緊密化させ、深化させ、活性化させていくことが北東アジアの平和と安定を確保する最善の方法である。またそれが日本の国益に直結する。

昨年の政権交代以降、日米関係は必ずしも良好な状態とはいえない。早急に緊密な日米関係を再構築しなければならない。日米同盟が漂流して最も痛手を被るのは日本なのである。

日本は自らの弱さを自覚し、このQDRが示す米国の悲鳴をチャンスと捉え、早期に関係修復を図り、北東アジアの平和と安定の確保に日米が再びタッグマッチを組めるよう主体的に努力していくことが求められている。

注：「1-4-2-1」戦略は米本土の防衛、4つの地域での前方抑止、2つの地域でのほぼ同時の迅速な作戦遂行、そしてこれらの一つで決定的な勝利を収めることを狙いとした戦略

新入会員紹介

1 正会員

氏名	住所	氏名	住所
渡邊 寛	神奈川県横須賀市	宮脇 俊幸	東京都北葛飾郡杉戸町
金田 久生	茨城県宇都宮市	溝口 博伸	神奈川県相模原市
上田 完二	千葉県我孫子市	田中 淑智	静岡県伊東市

2 個人賛助会員

氏名	住所
鈴木 昭一	東京都国立市

3 法人賛助会員

氏名	住所
株式会社ハタダ	東京都大田区

会員募集

今期は関係各位のご努力下で正会員6名、個人賛助会員1名、法人賛助会員1社、名誉会員1名の合計8名1社の入会を得ることができました。会勢拡張目標を正会員300名、個人賛助会員50名、法人賛助会員50社と定め精力的に活動しておりますが、正会員数が243名（22.12.1現在）と目標にはるかに至っておりません。

今後とも、会員の皆様の勧誘、推薦、情報提供に関するご協力、ご支援を是非とも宜しくお願い致します。なお、個人会員の入会につきましては、次のとおりです。

推薦若しくは情報提供を頂いた方には直接会員担当係から連絡させていただきます。

【入会資格】

正会員：航空自衛隊のOB

個人賛助会員：航空自衛隊のOB以外の方で、正会員3名の推薦が必要です。

【連絡先】

○郵便 〒162-0842 新宿区市谷砂土原町1-2-34 KSKビル3F
日米エアフォース友好協会 会員担当 行

○（会社）メール、電話

石渡 幹生 : m-ishi@shimadzu.co.jp 03-3219-5638

松田 和彦 : kazuhiko_matsuda@mhi.co.jp 03-6716-4433

美馬 博 : h-mima@zp.jp.nec.com 03-3353-9720

金子 康輔 : kkaneko@mpnet.co.jp 03-5531-8061

編集後記

◇今号ではJAAGAとも関わりの深い日米軍兼第5空軍司令官の交代記事をトップに、この半年近くの間のJAAGAの各種活動に関する記事を掲載しています。現役自衛官に対する激励から日米の親交を深めるスポーツ大会に至るまで、JAAGAが幅広く活動している様子がおわかりいただけると思います。また、寄稿記事として、米国防省2010年「4年毎の国防計画見直し（QDR）について」を掲載しています。

◇今号からJAAGAだよりの編集担当者が交代しました。今後ともJAAGAの活動を広く伝えていきたいと思っていますので、会員の皆様のご協力をお願いいたします。

◇JAAGAは、来年創設15周年を迎えます。現在、平成23年7月7日（木）に開催予定の記念行事に向けて、委員会を設置し準備を進めているところです。祝賀会や企業展示等様々なイベントを企画していますので、皆様の参加をお待ちしております。

（編集子）